











錦西激戰報  
日本近信

## 馬上に大刀を揮ひ 群がる敵と白兵戦

衆寡敵せず

### 古賀聯隊遂に全滅

昨臘錦州政府の壊滅後、吾室師團は威風堂々錦州に入つた。が地に陥り戦死傷者は見る々々山を築つくに至つた。一方糧秣輸送より馬賊正規兵の區別なく或ひは電信、鐵道を破壊し或は送護の任にあつた。○兵〇〇隊も锦州の西北錦西の十五支里の地點に出動し匪賊討伐に從事して居たが敵情偵察の結果、端なくも一偵察隊は黄顯聲を首領とする正規兵に匪賊を交へ約三千の有力な敵騎部隊が錦西の周囲に迫りつゝあるを察知し直ちに急を○隊本部に告げた時は一月九日午後十時過の凍夜であつた。

同日午前古賀聯隊の一部は錦宿して居た。○本隊は約一〇隊に過ぎなかつた。急を受けた本隊は直に傳騎を錦州に急行せしめ後方連絡の完全を期すると共に防備を厳にしあつた。然るに明け十日前八時頃滿洲の特有の黃塵萬丈寸沢も見分かぬ西北方に黃砂を巻き吹き起つた。烈風に乘じて突如として吾軍の二十倍に余る敵兵が襲來して來たり。急進軍を西方に集め馬上に大刀をもつて迎へたが砲を持たぬ悲しさ寡兵如何ともし難く惡戦苦闘であつた。敵は背後に有機銃隊が後續し漸次我軍を包囲し機銃銃隊は側面より猛射を浴最後を遂げた。又栗本一等軍

議會までに具體案を作成し四月立案中で近く開かれる隣府縣協議會に於いては飛行機利用の漁業取締りをしておられるが密漁船の發達につれては十分なる効果を擧げることができないのを嘆息したが出血甚しく意で本年度の新しい試みの一つとして飛行機利用の漁業取締りを

實現のはずである。

### 飛行機で

#### 密漁船検舉

愛媛縣の新しい試み

馬上に大刀を揮ひ  
群がる敵と白兵戦



## 故村録 七

第十回

睨んでゐる勝馬の眼に威しく、められた權六、列は頓着なく静かに進んで行くのに、彼のみが列外に飛び出し、死人色の顔で棒立ちとなつた、それはホンノ一瞬間、横々飛びに丸くなつた。權六は、自分の元の位置を目ざして闇の口へ逸散に走つた、その鼻梁がぶつかりさうな處へ、役人の棒が一本トンと地面に音をさせて突つ張られた。

「は？」と思を呑んだ權六は、列中の人々に続る順才もなく、鳳走りに土下座してゐる旅人の間に割つて逃げた、恰も廣げか網へ飛び込んだ獲物だ、六人の足軽は遠近から一度にしめたと包围した。

列はまだ續てゐる、勝馬は獲物を味方に任せて、自身はその場にサンと胸を反らして控へたのは、青山家の談判を待ち受けたる爲であつた。

「貴殿でござるな、只今列中の小者を連れて行かせたのは」徒士か徒士自付か四五人でぐるりと素早く勝馬を包囲した。

「いかにも拙者です、後刻三島宿本陣まで伺ひお断り申さうござんじ、御通行につきこに差し控へてをりましたが、お尋ねを蒙る以上は失禮乍らこの處にて遠くへ行くのに、便宜を與へたいた詐略である。

「何の意趣で列中を擾した、それをお承らう」相手は露骨に怒つてゐる、指馬では大久保加賀守家来郡勝馬です、只今の者は重罪人につき江戸へ召連れますなれども」

「首をとられても思ひ置く事は

たゞ者の文盲とは格段の違ひださういふ主人を持つてゐる尼ヶ寺藩だけに、勝馬が無事でゐらぬ筈はない。

兵術の分別の爲は知らないが至つてはこれ又只驚かざるをさい」といはれた時から、勝馬はひそかに青山公を欽仰した、勝馬はやくとしてゐた頭の中の雲は一時にはれて世の中が今までよりも明く思へた。

はひそかに青山公を欽仰した、勝馬

得ない、菊池寛を筆頭に久米正

雄、大佛次郎、白井喬二、三上

於菟吉、外文豪、大家づらりと並

んだ豪華振り。

まだその上にキング獨特

の感動感激の名讀物、滑稽物、

附錄は右の通りだが本文

に至つてはこれ又只驚かざるを

され

たゞ何なしに「お引とりくだ

さい」といはれた時から、勝馬

はひそかに青山公を欽仰した、勝馬

はやくとしてゐた頭の中の雲

はひそかに青山公を欽仰した、勝馬

はやくとしてゐた頭の中の雲